

【分科会抄録】

演題「外国雑誌センター館の現状と課題：今後の在り方の検討に向けて」

氏名 藤江 雄太郎

大阪大学附属図書館 生命科学図書館

昭和 52(1977)年に文部省からの『拠点図書館』としての予算措置が開始されて以来、当館を含む外国雑誌センター館は日本における外国雑誌の収集・提供の拠点として、大きな役割を担ってきた。

外国雑誌の収集の観点からみると、当初は国内で欠落している外国雑誌の体系的・網羅的な資料収集を目指していたが、2000年代に入るとレア・ジャーナルを収集する方針を明確化する方向へと舵を切り、2010年代以降はパッケージ契約も含めた電子ジャーナルの導入も進めてきた。日本における学術研究コミュニティや大学図書館の置かれた状況に応じて、収集方針を変更・調整し、最適化を図ってきたといえよう。

現在、外国雑誌センター館が置かれている状況は、収集面と提供面双方で相当に困難なものとなっている。収集面では、日本の大学図書館界全体における問題と同様に、外国雑誌の継続的な価格上昇と、図書館予算の厳しい状況が継続的にある中で、ここ数年の大幅な円安が追い打ちをかけており、契約タイトルを縮減せざるを得ない状況が続いている。一方で、提供面では、国内における相互利用による文献複写件数が長期的に減少している状況に比例して、当館を含む医学・生物学系の外国雑誌センター館においても同様の減少傾向が続いている。

このような現状に加えて、全世界的なオープンサイエンス推進の潮流がますます進んでいることや、国内においても今後の図書館間相互協力や文献入手のセーフティネットの在り方についてさまざまな議論があることも受けて、外国雑誌センター館として今後の在り方を改めて検討する必要があることは間違いない。本講演では現状と課題をご報告したうえで、これまで医学・生物学系外国雑誌センター館を利用していただいていた参加者の皆様からのご意見も伺いながら、外国雑誌センター館の今後の在り方を考えていく場にしたと考えている。